

# 古文書倶楽部

【発行】  
秋田県公文書館  
2009.9  
第30号

今月のおすすめ古文書

安政二卯年十月二日江戸地震記録(混架一八一六〇)

この資料には安政二年(一八五五)十月二日夜十時頃に起きた地震の様子が記されています。地震の被害は大きく、江戸の死者は四千三百人に達したと言われています。ところがこの資料をめぐっていくと、最後の十枚で地震とは全く無関係の記事が出てきます。

俗二鼠小僧ト申候 無宿 異名 次郎太夫事

盗賊二相当候もの 入墨 次郎吉 三拾六歳

右之者怪敷趣相聞候二付、召捕相尋候処、先達て中より度々御沙汰有之候、御屋形向其外諸家奥向并長局等へ拾ヶ年已前より数ヶ処へ忍入、金子盗取候旨左之通申立候

何と！江戸の数多くの大名屋敷に潜入し金を盗んだ、鼠小僧次郎吉(一七九七〜一八三二)の記事なのです。

八九年已前八月十六日土蔵戸前網戸下板ヲ鋸にて引切、金四百式三拾両盗取候由

戸田采女正殿

当四月中奥向へ忍入、金三拾八両程盗取候由

細川長門守殿

去卯年十二月頃奥向へ忍入、金百八拾両程盗取候由

仁賀保孫九郎殿

同八月頃奥向へ忍入、金三拾両程盗取候由

前田大和守殿

という具合に、盗みに入った大名・旗本の名前、犯行場所、金額が記されています。その数九十五!

記述の最後に「五月十日 定廻」とあることから、これ

当館では古文書の解説、内容の相談に応じる「古文書相談日」を設けます(全文解説、書画解説、価格評価・鑑定は不可)。日時は毎月第二・第四火曜日一時〜四時。ご希望の方は事前連絡を。電話番号〇一八(八六六)八三〇一

は鼠小僧を捕縛した北町奉行所の尋問書を写したのではないかと推測できます。

さて尋問書冒頭の戸田采女正は美濃国大垣藩十万石・戸田氏庸で、文政六・七年頃に土蔵から四百二丁三十両が盗まれています。

次の細川長門守は常陸国谷田部藩一万六千石・細川興徳で、鼠小僧が捕縛される天保三年(一八三二)五月五日の一ヶ月の犯行であったことが分かります。被害金額は三十八両。犯行場所は女性が住んでいる奥向でした。

仁賀保孫九郎は旗本・仁賀保氏で、捕縛前年の天保二年(一八三一)十二月に奥で百八十両が盗まれています。前田大和守は上野国七日市藩一万石・前田利和で、これも捕縛前年の天保二年八月に三十八両が盗まれています。では、現在の秋田県にいた大名を見てみましょう。

同年(天保二年)五月頃、長局へ忍入金三拾両程盗取候由

六郷兵庫頭殿

八・九年已前、五・六年已前都合三度奥向并茶の間等へ忍入、都合金九両程盗取候由

佐竹右京大夫殿

本庄藩二万石の六郷政恒の被害金額は三十両。一方の秋田藩二十万石佐竹義厚は三回盗みに入れ合計九両。被害金額と大名の石高が必ずしも比例しないのが面白いところ。それにしても、秋田藩の被害金額が九両なのは、セキユリティが万全だった?それとも、お金が無かった?どちらでしょう。

大名屋敷は南北町奉行所の管轄外で、かつ大名は金が盗まれてもメソツを気にして訴え出なかったと言われています。当館収蔵の他の秋田藩関係資料には藩邸で盗まれた九両の記録はありません。では問題です。次の大名の被害金額はいくらでしょう?

仙台藩伊達家

盛岡藩南部家

弘前藩津軽家

彦根藩井伊家

(解答は二面に)(畑中康博)

新しく公開した資料の紹介

小貫家文書



閲覧室奥に小貫家文書の複製本があります

国文学研究資料館(東京都立川市)所蔵の小貫家文書をマイクロフィルムで撮影し、複製本を作り閲覧室に配架しました。小貫家文書は院内銀山の勘定方や財用方、土崎湊役所の詰合、軍事方、仙北郡や山本郡の郡奉行を勤めた秋田藩士の資料です。

江戸時代の院内銀山や阿仁銅山の実態を知る上で、欠かすことのできない資料群です。

井上隆明収集資料

元秋田経済法科大学長・井上隆明氏の寄贈資料で秋田藩医の鎌田家文書が中心です。

根田雄一郎収集資料

元秋田公立美術工芸短期大学非常勤講師・根田雄一郎氏が収集した謡曲本や映画・演劇関係の資料群です。

お知らせ

公文書館講座アーカイブズ・コース開講迫る。10/2 江戸後期の農村行政 10/16 発見!秋田の天保国絵図 10/30 湖上の決着 11/13 鉄道馬車、秋田を走る 申込受付中! 電話でお問い合わせを。

古文書こぼれ話

久保田城北搦田の勝景

日一日と深まりゆく秋。館蔵資料から、江戸時代の文人たちの詩心を誘った搦田の勝景を紹介しましょう。

搦田(現旭川南町ほか)は、添川を通して奥深い仁別に連なつて変化に富んだ自然が残され、藩主の狩獵地として、また風情ある景勝地としても秋田の人々の心を動かし、文人たちを啓発しました。

秋田藩の享保の改革を推進した家老で優れた文人でもあつた今宮義透が元文三年(一七三八)八月に詠み、「如斯亭記」にも収録されている搦田別墅八景では、その表題として

太平嶽名月 添川清流 高尾山残雪

搦田落雁 仁別清風 信寺鐘音

孤林翠松 草庵夜雨

が挙げられ、石井忠行が著した「伊頭園茶話」では、正徳二年(一七一二)頃発句の集板行として得月堂十六景を採録しており、

得月夜雨 推古秋月 天徳脱鐘

泉村晴風 経来暮雪 刈田落雁

搦田夕照 東岳松声 泉福新樹

添川流螢 抓木紅葉 仁別売炭

民家墓煙 市店醉歌 磐戸靈灯

正洞晨鐘

が十六景の表題として記されています。

太平山を始めとする山々とその間を走る清流添川、木々の緑と紅葉、雁・螢・月・夕照の花鳥風月、更には天徳寺等古刹の鐘音等、漢詩の題材には事欠かない風情です。得月堂

とは藩主別邸として国名勝に指定された如斯亭の前の名。推古とは手形山。搦田の呼称は、この地が城の搦手に位置するからでしょう。しかし、この地を漢詩の対象となる中国独特の山川に似た風景と評した手柄岡持が記す「唐を見ると云う心を持ちてからみでんといふものならんか」(『如斯亭記』)とする伝聞も、夕暮れ間近な久保田城の平成御隅櫓から俯瞰すれば、一理ありそうに見えてくる趣ある勝景なのです。(渡部紘一)

晩秋のギャラリー 「秋府十景」の世界



「長沼落雁」(吉田 79-9) 現在の秋田駅付近です。